

「梅小路公園 朱雀の庭・いのちの森」が 環境省「自然共生サイト」に認定されました

■生きもののすみかになり得る場所の例。まちなかの緑地も生きものに使われることがあります



▲奥山の環境



▲里山の環境



▲庭園



▲街路樹・公園樹



▲いのちの森にカリガネソウ（京都府準絶滅危惧種）を植えている様子。水の流れの環境が合ったためか、大きく育ち、毎年花が咲かせています。



▲自然観察会の様子

自然共生サイトとは？

— 生物多様性を高めるのに役立つと認定された場所のことです —

自然環境には、山あり谷あり、いろいろな地形があって、ありとあらゆる生きものがすみ、お互い複雑に関係し合いながらすんでいます。これを生物多様性といいます。

日本の生物多様性は、(1)奥山のような手つかずの自然と(2)「里山」といって、人が生活のために手入れを入れてきた山や森で主に保たれてきました。

しかし、現在の便利な生活とひきかえに、手つかずの自然は開発などで減り、里山では人が入らなくなり、手入れもなくなりました。その結果、生きものがどんどん減って、生物多様性が失われつつあります。悠久の時を経てきた生物多様性は、一度失うとなかなか元には戻りません。昔から続いてきた生きものたちとの関係を、今の私たちが捨てることになりかねません。

2022年、世界各国は生物多様性が失われるのを止めて、2030年までに逆転させる「ネイチャーポジティブ」の目標を示しました。これを機に、日本も国土の30%を保全地にすること(30by30)を目指し、「自然共生サイト」の認定制度が始まりました。

自然共生サイトとは、私たちの身近な場所を含めて、国(環境省)が生物多様性を高めるのに役立つと認定した場所のことです。例えばまちなかでも、公園や街路樹、会社内の緑地、日本庭園、さらには家の庭にいたるまで、すでにいろいろな生きもののすみかになっているところが数多くあります。

草木の生えていない貨物駅の跡地に一から森をつくった「いのちの森」(1996年開園)。およそ30年の時を経て、2024年10月、都会のど真ん中にあるこの森が、となりにある日本庭園「朱雀の庭」とともに自然共生サイトに認定されました。



▲いのちの森の中心部

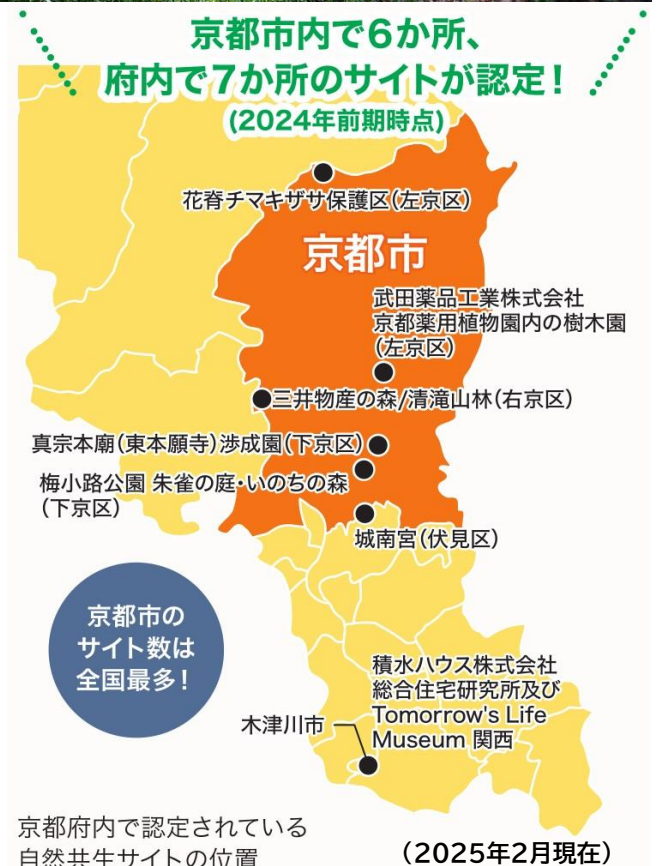
「和の花」を守る取り組み

京都の野山では環境の変化により、昔はよく見られた在来の草花(私たちは和の花と呼んでいます)の多くがほとんど見られなくなっていました。そうした植物たちがこれからも身近な存在であり続けるためには、元の環境が良くなるまで別の場所に植えて守り育てることが必要です。専門家とも協力し、いのちの森に植えて守る取り組みを行っています。

いのちの森の モニタリング調査

元は森でなかったいのちの森で、どのような生きものがいつすんで、また、どのように変化しているのかを調べるため、定期的に観察するモニタリング調査を行っています。「京都ビオトープ研究会 いのちの森モニタリンググループ」により、植物、鳥類、菌類(きのこの仲間など)の3つのグループについて開園直後から月に1回のペースで続けられています。その結果、自然の山林と同じく植物と菌類との共生や、人が植えなくても風や鳥が運んで芽生えた植物、絶滅危惧種の鳥の飛来が確認されました。ボランティア活動により、ビオトープの調査が30年近くも継続されてきた例は国内でもほとんどありません。

毎週第3土曜日午後2時から是一般向けの「自然観察会」を行っています。



京都府内で認定されている
自然共生サイトの位置 (2025年2月現在)



▲モニタリング調査の様子